

六月二十二日は妹の命日で、ちょうど日曜日と重なったため、その日に私のふるさとの奈良の禅寺で三十三回忌の法要が行われ、私たち兄弟や両親が七年ぶりで一堂に会することとなった。

父は九十四歳、母は八十七歳の高齢で、生きていた間に家族で会えるのは、これがおそらく最後になるだろうという思いが家族、とりわけ年離れた母の心にはあつたようである。

私たち男兄弟三人に妹が新たな家族の一員として加わったのは、昭和二十七年五月三日で、その時の記憶は今も鮮烈に残っている。

妹の名は幸子といい、皆から「幸ちゃん」の愛

称で呼ばれてすくすくと成長し、身長も大正生まれながら長身の母と同じ

## 族 豊

## 家 北村

く、一六八センチのすらりとした体型となつた。私も同じ身長であつた

が、妹や母はどうしたわけか私より脚が五センチ位長かつた。

その脚の長さが走るのに向いていたのか、陸上競技を始めた幸ちゃんは、またたく間に頭角を現し、奈良県や近畿の記録を次々に塗りかえた。

高校時代は、三年連続してインターハイ全国大会、国体にも出場し、人一倍元氣な幸ちゃんだったが、思いもよらない急性骨髄性白血病で余命一カ月の宣告を受けたのは、高校三年の秋であつた。漢方を専門とする兄の治療が効を奏したのか、病床で卒業式の日を迎えることはできたものの、十九歳の若さで旅立ってしまった。

療養中は何回もA B型

の輸血が必要となり、私も輸血のために駆けつけたことがあつたが、当時大学の空手道部で厳しい練習でしごかれていた私の体を案じて、生きるか死ぬかの瀬戸際にいたにもかかわらず、幸ちゃん

は涙しながら、私の輸血の申し出を拒否した。

大学に戻る私に、病床より手を差し出しながら、「お兄ちゃん、握手して」とつぶやいた。兄らしいことを何にもしてあげられなかつた私が、幸ちゃんのささやかな願いをかなえ、妹の手の温もりを感じたのはそれが最後となつた。

短距離走のように人生を駆け抜けていった妹が私たち家族に残していったものが、悲しみだけで

はなかつたことに気づいたのは何年も経つてからだった。私たちに家族とは何なのかを考える機会を与えてくれ、本当のやさしさ、思いやりとは何なのかを身をもって示してくれたように思っている。

妹の生き方、そして死を通して学んだことは、私の診療の基本姿勢として生きていると信じている。

信州に戻るため、家であとにした私は、後ろ姿が見えなくなるまで門前に立ち続ける母の胸中を思いながら帰途についた。

お母さん、ありがとう。  
(新生病院歯科口腔外科 医長)